

2020年10月11日 大井バプテスト教会 礼拝説教

説教題「恐れるべきもの、恐れなくてよいもの」マタイ10章26～31節

主任牧師 加藤 誠

**「体は殺しても、魂を殺すことのできない者どもを恐れるな。むしろ、体も魂も地獄で滅ぼすことのできる方を恐れなさい」(マタイによる福音書10章28節)。**

主イエスは弟子たちを福音宣教に遣わすにあたって「恐れるべきもの」と「恐れる必要のないもの」を示されました。端的に言うなら、「神を恐れよ。しかし人びとを恐れる必要はない」と言われたのです。当時は絶対王政の社会で、ローマ帝国の権威に逆らう者、ユダヤ教の神殿指導者に逆らう者は厳しく排除されました。そのような社会で、主イエスの弟子として神の愛を語り、神の愛を生きようとすれば、社会の秩序を乱す者とレッテルを貼られて厳しい迫害が予想されたのでした。

昔も今も権力者は自分に歯向かう者を排除しようとし、自分の過ちや失敗を力づくで誤魔化そうとします。真実の告発に対しても「それはフェイクニュースだ」と断じて都合の悪い証言を封じ、時には邪魔者を抹殺して自らの過ちを覆い隠します。主イエスの十字架がその最たるものでしょう。当時の権力者たちは、偽の証言をでっちあげ、法律解釈を捻じ曲げて、無実の主イエスを十字架で亡き者にしました。「神の子イエスもたいしたことはない」と彼らはほくそ笑んだのです。今も権力者は事実を捻じ曲げ、裏で舌をペロリと出しています。もっとも本人が「誰にも気づかれていない」と思っているだけで、その誤魔化しは見抜かれているのですが…。しかし権力の脅しの前に人びとは沈黙させられていくのです。

けれども、そのような人間の誤魔化しは、神の前では通じない。どんなに隠し通そうとしても、人間の悪は必ずあばかれ、神の真実が現わされていく。人間は体を殺すことはできても、その魂(=存在)を亡き者にすることはできない。人間の悪が、神の愛、神の真実に勝利することはできない。だから「人びとを恐れるな。恐れる必要はない」、「私から聞いたことを人びとの前で堂々と語りなさい」と、主イエスは弟子たちを大いに励まし、福音宣教に遣わされたのでした。

かつての大学闘争の時、東大の壁に「体を殺しても、魂を殺せない者どもを恐れるな」と大書されていた話を聞いたことがあります。機動隊を前に戦意を鼓舞するための言葉だったのでしょう。どこかの国の大統領が「コロナウイルスなど、恐れるな!」と拳を振り上げて、人びとの熱狂を誘うのと同じように。けれども彼らは主イエスの言葉の後半「体も魂も地獄で滅ぼすことのできる方を恐れなさい」の部分を書くことはできませんでした。見えない神を恐れるということは、ナンセンス以外の何ものでもなかったからです。しかし神を恐れず、神の前に謙虚に自らを省みようとしない自己賛美と自己絶対化の権力ほど危ういものはありません。

それに対して聖書は「主を畏れることは知恵の初め」(箴言1・7)と教えます。

「主を畏れ、悪を避けよ。そうすれば、あなたの筋肉は柔軟になり、あなたの骨は

潤される」(同3・7～8)と。この場合の「おそれ」という漢字は、「畏怖する」「畏れ敬う」の「畏」という字が使われています。「恐怖に覚える」のではなく、「敬意を払い、尊重し、その前にへりくだる」意味です。

神を「畏れ」敬い、神の愛にしっかりとつながれる時、私たちは真のしなやかさと強さを与えられていきます。なぜなら、主イエスが教えてくださった神は、二羽で1アサリオン(アサリオンは貨幣の最小単位)で売られているような小さな、取るに足らない存在に見える雀のことも大切に覚えておられる神であり、私たち一人ひとりのことを大切に覚えてくださっている神だからです。その神は私たちのどんな小さな罪も見逃さない厳しい方ですが、罪人がそのまま滅ぶことを喜ばず、神の愛に立ち帰ることを祈り続ける神だからです。この神の愛につながられていくとき、私たちは自分の「的外れ(罪)」に向かい合う勇気と、隣り人と一緒に歩いていく優しさを与えられていくのです。

さて、今朝、この主イエスの言葉を聴きながら、わたし自身に響いてきたのは、「おまえは主なる神を正しく畏れているか」という問いです。神を軽んじて神に背を向けることなく、しっかり神の前に座ることができているだろうか。マルチン・ルーサー・キング牧師の有名な「コーヒーカップの祈り」というエピソードがあります。人種差別への抗議としてキング牧師たちがバス・ボイコット運動を始めた時、すぐに脅迫電話や脅迫状を受けるようになります。ある夜更けの電話はこう語りました。「黒んぼ、お前についてはすべて調べ上げた。お前はモンゴメリーに来たことを後悔するようになるだろう」。脅しにはもう慣れっこになっているはずだったのに、なぜか受話器を切った後、すべての恐怖心が一挙に押し寄せ、彼は居ても立ってもいられずにキッチンに行きコーヒーを温めます。生まれたばかりの赤ん坊のこと、妻のことを考えると耐え切れなくなり、何とかうまく表舞台から身を引く方法を考え始めました。するとそのとき声が聞こえたのです。「お前は今、父親に電話してはならない。母親に電話してもならない。ただかつて父親がお前に語ったあの方に語りなさい」と。キング牧師はコーヒーカップを前に突っ伏して祈り始めました。「主よ、わたしは正しいことのために立ち上がりました。しかし正直に告白します。わたしは弱く、怖いのです。勇気を失い倒れそうです」。するとその時「内なる声の静かな励まし」が聞こえたのです。「マルチンよ、神の正義と真理のために立て。見よ、わたしはお前と共にいる。世のおわりまで共に」。この瞬間、「それまで体験したことのない神の臨在を感じ、わたしの中から恐れが消えたのだ」とキング牧師は述懐しています。

私たちの弱さを知り尽くした上で、私たちのために祈ってくださっているインマヌエルの主の伴いを大切に受け取りながら、神の国の希望につながる働きに仕えていくことができますようにと祈っていきたいのです。「神よ、恐れるべきものを恐れる信仰を与えたまえ。恐れなくてよいものに向かい合う勇気を与えたまえ。そして、恐れるべきものと恐れなくてよいものを識別する知恵を与えたまえ。」